

いつか子供に読んでほしい その3

久保美鈴

津和野殺人事件

光文社文庫

津和野殺人事件

著者 内田康夫

1988年10月20日 初版1刷発行

発行所 株式会社光文社

感想と理由

初めて読んだのは、中学生の頃だった。

私の父は、西村京太郎にはまっていて、かなりの冊数を集めていた。

それを読んでいたのだが、巨匠には申し訳ないが、私は少々飽きていた。

そんな本の中から、違う著書の本に目が行った。

推理小説なので、殺人事件が起こる（最近のミステリでは、殺人事件のないミステリもあるが）。

「なぜ殺害に至ったのか」

「なぜこの場所だったのか」

「なぜこの時だったのか」

「なぜこの凶器が選ばれたのか」

「加害者と被害者はどのような関係だったのか」

アリバイトリックに腐心してばかりの小説ではなく、なぜ事件が起こったのか、なにが理由で事件は続くのか、人間を書いた小説だと思った。

推理小説でありながら、私にとっては「人間」を読む小説である。

その後、私は著者の本をかなり読破することになる。

あえて本書を選ぶのは、やはり魅力的だからだ。

過去は現在につながっていて、世代を超えて、生きている人間を容赦なく巻き込んでいく……

その時、その場で、様々な人が、様々な思いで、生きていた。

思いが行動となり、痕跡を残す。

それらを丹念に探し続けて、やがて、ひとつの真実にたどり着く……

また、津和野という古い小さな町にも、負う歴史と誇る精神がある。

—前略—

「いったい、自分を殺してまで守らなければならないほどの価値などというものが、あるのでしょうか」

「それはある」

森泉は浅見の口を封じるように、重く強い口調で言った。

「あなた方になくとも、津和野にはあるのです」

P270より

私はいままで、数回の引越しを経験して、距離にして300kmは移動した。

一つの土地、一つの家で長く暮らすことは、憧れのままだ。

土地に根付いて生きることは、因習に囚われることにもつながるが、

変わらない風景、変わっていく景色、その中で生きてみたいと思っている。

子供は成長して、いつか巣立つが、「いま」が懐かしい場所となるべく、生きてほしいと思う。